

講 演

私の見た草創期の創価大学

角 山 榮

生涯忘れられぬ、草創の四年間

皆さん、こんにちは。

講演が始まる前に、まったく予期しないことでしたけれども、創価大学の「最高榮譽賞」を戴きました。本当に名誉なことと感激に咽んでおります。

ところで、この大学は、昭和46年に開学しましたが、私は1期生から4期生までの4年間、講義をさせていただきました。非常に懐かしい30年前の思い出です。そして、私の教壇生活は、昭和22年からちょうど7年前の平成7年までで50年が経ちました。従って、私は、その年を境に教壇に立つのを止めました。いま50年を振り返ってみて、最も生涯忘れることの出来ない授業と言いますか、講義というのが、この四年間の創価大学でした。

皆さんのように、創立後30年経っている大学に入って来られる学生と、創立当初に「これから大学を創るんだ」という時に入って来た学生とでは、全然、意気込みが違うと思うんです。

私は創価大学の創設期と、戦後、新しい校名に変わった国立「和歌山大学」にも、当時若僧でしたけれども、関係をいたしました。それから、定年になってから行った奈良のある大学の創設にも若干、関係をいたしました。創価大学では、関係したと言っても、スタートから関係したのではないのですけれども、1期生から4期生までの間、ここの教壇に立ち、本当に一生忘れられない感激の4年を過ごしました。何を感激したのかという話を、これから若干話してみたいと思います。

時代背景に大学紛争、ベトナム戦争

創価大学が出来た1971年、昭和46年というのは、どんな年だと思いますか？まだ、皆さんの多くは、生まれていないでしょう。開学の2年前に、実は、東大が「大学紛争」のために、東大が始まって以来、初めて入学試験が出来なかったんです。そんな年なんです。1969年には「大学紛争」がピークに達して、東大安田講堂に立て籠もっていた学生が、8500人の機動隊によって封鎖を解除させられた。すごい攻防戦でした。これは1月のことでしたから、3月に予定していた入学試験が中止された。東大の歴史始まって以来、そんなことはなかったわけです。

その翌年、1970年3月15日には「大阪万博」が開催されました。その直後、3月末に、私は、イギリスへ学会出張のために、羽田からモスクワ経由パリ行き日本航空のメイドゥン・フライト (maiden flight) と言いますか、処女飛行に乗りましてモスクワ・パリを経て、そしてロンドンに入りました。その日航機には、たくさんのJALのお偉方や招待客が乗っていました。ほとんどの招待客はモスクワに行く人たちでありました。

その3日後、ロンドンのホテルのベッドでラジオを聞いていると、日本の飛行機がハイジャ

ックされて、ファイター、戦闘機が追いかけているという情報が入ってきました。「よど号」がハイジャックされたのです。現在、亡命先から「帰ってくる」とか「来ない」とか言っている赤軍派が、JAL機をハイジャックして北朝鮮に行ったんです。このように「万博」で国を挙げて、経済成長の栄華を賛美している日本で、同時に、こういう出来事が起こった年でもあったのです。そして、その翌年、共産党の知事が大阪府に誕生しました。この黒田了一という人は、大阪市立大学法学部の憲法の先生でした。京都府知事蛭川虎三さん、そして、大阪の黒田さん、共産党がいわば上り坂だった時代です。

一方では、この年、1971年から72年にかけて、日本のGDPはアメリカに次いで世界2位でした。21世紀は“日本の世紀”になるんだ、と思っていた時代です。その時、「明日という字は明るい日と書くのね」という日吉ミミの歌でしたか、がありましたね。皆さん知らないでしょう？ 私も長い間、「明日」という字を書いていたが、「明るい日と書くのね」とは、その歌で初めて教えられました。とにかく、「明日は明るいんだ」と、日本は「万博」で浮かれていましたが、その年の中頃には、公害による「イタイイタイ病」の発生が、ものすごい勢いで社会問題になってきたのです。

そういう時に、世界一の強国、アメリカが、「ベトナム戦争」に介入し、財政的にも苦しくなった。その結果として、71年8月には、ドルを切り下げざるを得なくなったわけです。今まで1ドル360円だったものが、いっぺんに308円に下がった。いわゆる「ニクソン・ショック」と言われるものです。社会情勢を簡単に言いますと、こうしたことが創大が出来た時代の背景にあります。

開学前に文部省と掛け合う

創価大学が出来た時に、私が、どのように関与したかを申し上げておきましょう。昭和43年か44年でしたか、大学が出来る2年ぐらい前だったと思いますが、ある日、後に経済学部長になられる関順也先生（後に、初代創価女子短大校長）が、私の家にお見えになりました。私は、和歌山大学で図書館長もやり、学部長もやりましたので、文部省（当時）との間に、いわばルートを持っておりましてし、ノウハウも若干分かっていました。また、和歌山大学では大学院もつくりましたので、そうした関係で文部省に何回も行って顔見知りもおりました。関先生が見えて、「創価大学をつくるんや。助けてくれへんか」。「君、学部長やるんやろ？ しっかりせいや」。彼とは、京都大学では同じゼミナールです。年齢は私より関先生の方が上なんですけれども、実は、彼の方がゼミナールでは後輩なんです。そんな関係で、私の家に来られて、そういう話があったんです。

関先生は日本経済史、私は、西洋経済史で、同じ経済史なんです。それで、申請を出す段になって、「西洋経済史は誰や？」と聞いたら、今日も、ここにいらっしやる北さん（現、教授。比較文化研究所所長）ということでした。しかし、彼は、まだその当時、大阪大学大学院の学生なんです。だから、「ちょっと無理やな。文部省通らへんで」と言ったんです（笑）。

仕方がなく、大学としてはそのまま、提出したところ、文部省でクレームが付いて、「研究では講師採用は可であるが、誰か、ちゃんと講義できる人を正式に迎えた方が良い」と、こう言われたと言って、また、相談に来られたんです。北さんは、私の大学院での、私のゼミです。だから、北さんより上の、例えば、東大の先生が来るとか、あるいは大塚史学系の人たちを連れて来られたら、彼が困るだろう。そこで、私に、すでに名前を出しているから、文部省に行ってもらいたい、ということになったのです。

そこで、文部省にまいりましたら、「角山さんが講義にくると言うなら仕様がないな」という話で、その一言で決まりました。本来なら他の先生が来ているはずだったので、それで私がここへ来ることになったのです。しかし、私が北君の上に来るとなると、彼が気の毒なことになりますから、私は、毎回は出て来られないこともあり、非常勤講師となったわけです。たまたま、その年、昭和46年から、私は、日本学術会議の会員になりまして、東京には毎月のように来ていました。従って、私が上京する時に、ここで講義をする。その後は、北さんにお手伝いをしていただき、色々、面倒を見てくれるということで、私は来ることになったわけです。

経済史で“大塚史学”批判を講義

最初の講義は、46年の4月から始まったんです。

4月から始まっても、誰も上級生がいないわけでしょう。新入生300人。ここは、入学生を定員どおり真面目に取られたんですね。普通、私立大学で定員300人といったら、当時は、少くとも400人は採用するんです。ここは一組50人で6組。きちっと300人で水増しも何もないんです。私立にしては立派な大学です。ところで、創大にどういう学生たちが集まったか。本当に、「これから自分たちで、新しい21世紀を、日本の、世界の21世紀をつくるんだ」という情熱に燃えた学生が大多数でしたね。

私は、この大学で「一般経済史」を持ちました。後には、「西洋経済史」を持つことになります。その授業の中で、私は、大学というところは研究するところであると同時に、教育するところである、ということを実感しました。大学は学問研究という面、そして講義という二つの仕事が先生に課せられていることを、改めて、教えられました。

普通、大学というところは、私は、ずっと京大ですけれども、戦前の国立大学（帝国大学といつた）で経済学部といえば東大と京大の二つしかなかったんです。そして、経済学部の教授というのは、二つしかない帝国大学の教授ですから、日本を代表する第一線の研究の成果を発表するという形で講義をされる。それを我々学生はじっと聞く。だから、原則として毎年、同じ講義というのではないんです。毎年、違う新しい最先端の研究成果の講義です。ということは、テキストは使わないんです。

毎日が新しい、毎々が新しいということになれば、極端な場合、「ノート講義」しかないのです。そのノート講義というのは、今みたいに、印刷機、情報機器も発達していない時代ですから、先生がノートに書き上げてきた原稿を読み上げて、「一何々・・・行変えて」と、そんなことまで言って、ノートを取らせていたんです。そうすると、やがて1年か2年後になると、ある場合にはその講義が一冊の本になったものです。

それが、テキストと言えばテキストだったわけですが、いわば講義録ですから、また年が替れば新しいのが出ます。私は、それを創大でやろうとした。ところが、戦前は、わずか200人くらいしか学生がいなかったの、それでも良かったのです。ところが、だんだんと学生数も多くなってきましたら、むしろ「テキストを作ってほしい」という学生の要求が上がってきたものですから、やむを得ずここでは、私は、テキストを使わせてもらいました。

しかし、私が、和歌山大学で講義をしていた時は、ずっと毎年、京都大学で教えられたように新しいノートを作って、そして学生の前で、「これが、一番新しいんだ」と、講義をしたものです。何を講義していたかと言うと、「大塚史学」批判であります。

「大塚史学」と言っても、今の人は知らないでしょう？ 日本を代表する東大の偉い先生、

大塚久雄という先生で、この方が経済史だけでなく、あの当時、日本は敗戦直後ですから、どのようにして国を建て直すか、日本の経済を立て直すか、という国民的課題がありました。それに対する歴史的な解答、ヒントを与えたのが大塚史学であったわけです。

しかも、大塚さんは、イギリスの経済史を中心に研究してきた方ですから、「これからの日本は、戦時中のもを含め、封建的なものを廃して民主主義を確立しなければならない。そのモデルがイギリスである」という考えを持っていた。それからもう一つは、日本は、明治維新以後、非常にいびつな経済の発展の仕方をしてきたんだ。だから、こんな戦争までしてしまったという反省も込めて、今の言葉で言う「工業化」、これをもう一度イギリスがたどってきた道を学びながら、資本主義への道をイギリスをモデルにして考えて行こう、と言われていたのです。

そして、日本も封建的なものを改革し、資本主義の発展を可能にする条件を作り出していきましょう。「市民革命をやりましょう」ということなのですが、戦時中は、「革命」なんていう言葉を使うとえらいことになります。そこで、大塚さんは、戦争末期の1944年に『近世欧州経済史序説』という本をお書きになります。そこには大塚史学のエッセンスがあったのですが、それを読みますと、いわゆる封建制から資本主義への移行については「市民革命」「ブルジョワ革命」の道を辿らざるを得ないというわけです。大塚さんは当時禁句であった「革命」という言葉を使わないで、そういう図式を出していました。

もっとはっきり言いますと、大塚さんの後ろには、政治的に共産党の言う理論がありました。それを私は、如何に間違っているかということ、講義を通じてずっと「大塚史学批判」をやってきた。和歌山大学でもやりました。ここでもやりました。

ここが和歌山大学と違うのは、先程も言ったように、普通、テキストは使わないんだけど、だんだんそれを使わざるを得なくなってきたのです。そこで、何を使ったかと言いますと、ちょうど1年前の1970年に、私は、東洋経済新報社から『経済史学』という本を出しました。この中で、大塚史学批判を書き、新しい経済史として、いわゆる近代経済学の新古典派の経済史、そういう成長理論、成長史学を日本で初めて紹介し、提起したのです。

真面目で、意欲に燃える学生たち

私は創価大学では、朝の9時から始まる授業、1時間目を受け持ちました。金曜日だったと思いますが、その前の晩に、八王子からこの非常勤の先生の宿舎に来ます。夜中になると、バスなんかありません。大体、創大へ行くバスは夕方6時頃に終わっていましたから（笑い）。仕方ないからタクシーです。

ところが、タクシーの乗り場に行くと、学生らしい人が1人、2人いるんですね。

「何してるの？」と、一度、聞いたことがあります。「君、創価大学の学生？」「はい」「何してるの？」「3人くらい集まるまで、待ってるんです」と言うんです。タクシー代は高いですからね。大学まで学生の身で、一人でなんて乗るわけにいかん。寮へ帰ってくる学生が、夜中10時、11時頃ですよ。学生が、そんな頃まで何していたのか？ 東京へ行ったり、あるいは他のところへミーティングに行ってるんですよ（笑い）。

僕は、あまり事情は分からないから、タクシーの運転手に聞いた。「この学生どうですか？」「この学生は真面目ですわ。あんなして3、4人集まるまで待って、それでタクシー代浮かして帰ってきて1時、2時。それから寝て、朝6時に起きる」「ほう、そうか」。

私の講義は9時から始まる。翌朝、それまで時間あるから寮を見せてもらおうと思って行っ

た。そうしたら、びっくりした。もう皆、起きていますわ。6時から起きてるんです。それで勤行してるんですよ（笑い）。そして勤行が済んだら、ご飯を食べて、まだ、9時まで時間があるんですよ。その時間に、私がずっと回って見たら、私の『経済史学』というテキストを広げて予習しているんですよ。私は、長い間、「経済史」を教えてきて、テキストも使ってきた。しかし、「経済史」を予習する学生なんて聞いたことない。ものすごく真面目なんですよ。

それでぴしゃっと9時から始まる授業。このような大教室での授業は、もう少し学生が増えてからでした。初めは小さい教室で講義したのを覚えてるんですけども、確か9時まで、ほとんど学生は入っているんですよ、ここの学生は。前の大学では、9時に出席なんて、学生はおらへんから、9時から授業したことはないんです。ここで初めて9時から始まる講義をもったんです。ところが、皆が、9時前にぴしゃっと入っている。そして、私が、教壇に立つと、皆、ぱっと立ち上がって礼をするんです。今でもそうですか？（笑い）そう、えらい変わったな。（笑い）その時は、皆、立ち上がって礼をする。誰も、号令をかけるわけでもないんです。

ある日、学生が廊下を歩いて来たように思ったんだけど、ドアを開けて入って来るかな、と思っても入って来ない。どうなっているのかな、と思って、廊下のドアを開けて見てみたんです。倒れてるんちゃうかなと思ってね。そうしたら、廊下の外で私の講義を聞いていたんです。「君、君、ここで何してる？」「遅れて来ましたので、ここで講義を聴いております」。私は、こんな学生は初めてや。「どうぞ、入って下さい。遠慮せんで、ええから」って。入ってきた。真面目でしょう。感動しました。

そして、講義が終わったら、数人の学生が私の演壇を取り囲んで質問です。予習して来ているし、私の講義は、今も言ったように、「これからの日本をどうするか」ということなんですから、単なる昔の経済史の話と違うんです。大塚史学の話と違うんです。大塚史学は「今、革命を起こさないといけない」と共産党の言っていることを言っているんです。それはおかしいのではないか。ここで、私は真剣勝負をしているつもりだったんです。それが、ここの学生にはピンと響いたんですね。

日本では、その頃は、社会科学の方法についても、たいてい、大塚さんの『社会科学の方法』（岩波新書）という本を使っていました。その点ではものすごい影響力を持っていたんです。高等学校、中学校の教科書から大学のテキストまで、皆、大塚さん系列のものを使って講義するわけです。大塚さんはイギリス経済史、ドイツの方は松田智雄教授、それからフランスは高橋幸八郎教授という東大の三羽ガラスが揃っていました。それで「日本の経済史は、大塚史学で非ざれば人に非ず」という時代だったんです。

私は、それに対して敢然と、「それは間違っているんだ」と主張したんです。その当時の歴史学界の主流は、「一国資本主義論」「一国革命論」でやってきたわけですね。それは間違っていて、グローバルに物を見る見方が大事なんだと言ったんです。今でこそ「グローバル」「グローバルイズム」と言うけれども、私は、その当時から、大塚史学の「一国資本主義」に代わるものとして、「世界資本主義」ということを言っておりました。創大の学生は、あの時は本当に反応が速かった。

「21世紀は、自分たちの手で」との自覚

当時創価大学に対する評価、あるいは公明党、あるいは創価学会に対する世間の見る目は冷たかったんですよ。冷たかったらどうなる？ 冷たかったら、まともに就職することは難しいんですよ。そこでここの学生は何をしたか。僕は、今でも忘れません。彼らは言いました。「実

力で行こう、実力で」と。実力というのはですね、まず、資格を取ること。何の資格か。経済、経営の資格であれば、まず、会計士の資格を取る。学生たちは入学した時から、会計士の試験に合格するために研究会を持ちました。そして、「同志、集まれ」という形で募集した。そして入ってくるなり、その方面の勉強をした。学生でありながら、在学中に資格を取った。それも1人や2人ではない。これは、なかなか取れるもんじゃないですよ。私は、ずっと和歌山大学にいて、昭和25年から20年経っていましたが、在学中の合格というのは、ほとんどいなかったんじゃないですか？ まあ、1人取ったぐらいかな。ここは続々と取っている。

それからもう一つは、実力主義で行けるところは、例えば、メディア、新聞社、放送局、これらの会社は主義、主張に関係なく採ってくれる。それからもう一つは公務員試験です。しかも、外交官の上級職の試験の時は感心しましたね。大体、ここで3時半か4時半に授業が終わったら、あとはクラブ活動がありますが、それから信濃町に行ってセンターで勉強をし始めた。そこに夜までいて、語学を勉強する。これも私が聞いているところでは、続々と外交官試験に合格している。

そして、あの時は、忘れもしませんね。共産党は、先程から言っているように、ぐんぐん伸びていた時です。向こうもやりますね。創大にオルグを派遣したようです。ある日その紙ビラが貼ってありました。「何日に集まれ」という風なビラを貼った。しかし、間違っていましたね。誰も行かなかった。反応なしですよ。偉いね。

それは何故かと言うと、外の大学は当時、皆「大学紛争」を抱えていたんですよ。先程も言ったように東大もそうでしょう。和歌山大学でもそのために、私も身体をこわして、学部長を辞めざるを得なくなりました。すごい徹夜の断交だもの。そして、皆、多かれ少なかれ、教官も学生も主導権争いで、民青か反民青かで、とにかく大学は揺れていた。どんなところでも必ずその影響があった。ところが、ここにはそんな学生運動は出なかったんです。

不満、不平がなかったかと言うと、あるんですよ。あるんだけど、このやり方は他の大学と違っていた。例えば、この創立者の池田先生が、どう言っていたかということが、かなり大きなヒントになって、皆、その提言に基づいて考え始める。ここは宗教団体と言うけれども、私は、普通の宗教団体ではないと思うんですよ。関西にも宗教があります。仏教の本場ですし、天理教もあります。普通、宗教団体が大学か病院を建てたら、それで終わりという話なんです。しかし、ここは終わりではないんです。始まりなんですよ。だから、皆、そこが違っていて、「21世紀は、自分たちが創る」と言っていたのです。

大学に必要な「建学の精神」

今日も見てみたら、校舎の入口の碑に「人類の平和を守るフォートレスたれ」と書いてある。この大学の「建学の精神」ですね。やはり大学というのは、一つ理念がちゃんとしていないといけない。大体、国立大学には「建学の精神」がないんです。「国のため」と書いてあるだけなんです。だからいい加減なもので、今は「国破れて、山河あり」なんで、国が破れているのに「国のため」などと言っている。だから、戦後は「国のため」などという人はいなくなった。「会社のため」ということになっていった。ところが、国立大学はずっとそれでやってきた。ここは違います。

私は、この講義で「大塚史学批判」をやりました。それで何をやったかと言うと、先程、言いましたように、「一国資本主義」ではなくて、「世界資本主義」と言いますか、グローバルに歴史、あるいは経済を考えなければいけない、ということをお説きしました。そして、大塚さん

が言うように、封建制から資本主義への移行に問題があるのではなく、「産業革命」以後の資本主義が、どのようにグローバルに展開して行ったのか。その中で、どのように富める国と貧しい国が生まれて、この現代の世界の秩序は出来ているのか、ということを読みました。

それからもう一つ、「大塚史学批判」の中で、大塚さんは、生産中心ばかり言っていたんです。生産力ですね。ところが、物が無い時はそれでいいけれども、だんだんと豊かになってきた。これからは、そうではないのではないのか。むしろそれよりも、その生産物がどこの誰によってどのように消費されたのか。消費、あるいは、私は「暮らし」と言うようになるんですが、それが、これから如何に大事か、ということを読みました。それは、その後の、私の研究の中で、ここで講義したのが1971年から75年ですが、その結果が、75年の2月に河出書房新社から出た『産業革命と民衆』という本です。

これは、イギリス経済史の中で、大塚さんが全くやらなかった、産業革命時代の庶民の生活ですね。イギリスの労働者はどんなものを食べていたのか。お便所はあったのか、なかったのか。どういう水を飲んでたのか。あるいは洗濯はどうしていたのか。風呂は入っていたのか。そういうことを、私はこの『産業革命と民衆』という本で書きました。これはものすごく版を重ねました。10年以上あちこちでテキストに使われました。私は生活史と言いますか、消費中心の、物の消費だけが暮らしでなく、こころの豊かさのために「時間の消費」も入れて考えなければならぬと思うのです。

こうしてやがて、私は『茶の世界史』（中公新書、1980）『時計の社会史』（中公新書、1984）『時間革命』（新書館、1998）という本を書くんですけども、そういう点からも、ここで講義した1971年から4年間というのは、ものすごい日本経済の転換期であったと同時に、世界経済の転換期でもあったわけです。その講義をしている時、73年のことですけども、ご存知の通りの「オイルショック」が起こりました。これから資源問題、あるいは環境問題、人口、食糧問題は、一体、どうなるんだろうという問題が発生しました。そういう点も講義の中で取り入れられました。

そして、創価大学の学生も、その中でこれからの世界文明がどう動くんだ、ということ論議していました。現代世界の出発点がそこにあったわけですから、恐らくその時に学んだことが、今も延長して続いていると思うんです。

トインビー、池田対談の重要性

今日、東京牧口記念会館を拝見してまいりました。私が知らなかった、色々な展示を見せてもらいました。

一番大きな出来事は、1972年にトインビー氏と池田大作氏が対談していることでしょう。今年、ちょうどその30年に当たるんです。そして、その対談の成果として『二十一世紀への対話』が出たのが75年です。この年は、私は先程から言っているように、日本経済、世界経済の曲がり角でありました。この70年代の初めに、トインビーと池田大作氏が「これからの世界は、どう動いていくか」という二十一世紀への対話をやっているんです。

この対話のトインビーという人はご存知だと思いますが、オックスフォード大学を出まして、そこで「歴史の研究」に一生を捧げた歴史家です。ところが、このトインビーは単なる学者でなくて、やがて「王立国際問題研究所」の研究部長になるんです。このロイヤル・インスティテュート、これはロンドンの真中の一番いいところにあるのですが、このトインビーの研究所は、通称、「チャタムハウス」と呼ばれているんです。もっと言い換えれば、世界中の情報が、

戦前にですよ、そこに集まっていた。そういう所の研究部長なんです。戦後も、その役を続けていた。

彼が、戦前、世界中の文明の生成から発展、展開、そして消滅するまで、起こって消えていく文明の中で、日本をどう見ていたかと言うと、シナ文明のサテライトであった。そういう認識しか戦前トインビーにはありませんでした。ところが、第1次世界大戦から第2次世界大戦を経て、トインビーの考え方が変わります。彼は、戦前、一度、日本に来ておりますけれども、これは大して日本に注目したわけではございません。ところが、戦後に来たトインビーは変わっております。

1956年に来た時、六本木にある国際文化会館、イギリス人が来た時、よく泊まる会館で、私の友人なんかもよく泊まりますけれども、そこが彼を招いたのです。そして、トインビーは東京へ来ました。そこで東京の偉い大臣に会います。しかし、面白かったのは、彼が期待していたのは、京都の文化人です。京大の当代一流の学者と会うことを楽しみにしていました。西洋史で言えば、原随園という古代ギリシャの歴史家、イギリスについては深瀬基寛、中国については貝塚茂樹、フランスについては桑原武夫、そして哲学については西谷啓治と、こういった錚々たる人たちと対談をしたわけです。

桑原武夫先生は、私の高校の先生であり、トインビーの『図説 歴史の研究』の邦訳（桑原武夫他訳、学習研究社、1976）に、「後書き」を書いています。桑原さんによればトインビーと会った時に聞いたかったことは、「この現代の大衆社会をどう見るのか」ということでした。そういう風に問題を仕掛けたのですが、トインビーはあまり乗ってこない。向こうがこちらに聞いてきたのは、「大乘仏教」の話でした。それに対し、今、名前を挙げた先生がたは、誰一人答えられない。誰も受け答え出来ない。それでもトインビーは繰り返し、繰り返し、先生がたに尋ねているのです。

トインビーは75年に亡くなりますから、来日した時は晩年のことです。彼は今まで敬虔なるキリスト教の信者として、一生をかけて、その文明の盛衰を調べてきた。その中で、彼が最後に行き当たった問題が、いわゆるキリスト教を中心とする文明が、過去少なくとも二百年、三百年世界を支配しながら、このままで推移すれば絶対に人類は滅びるというものだったのでしよう。一神教のキリスト教の限界、あるいは文明の限界を悟って、あと残っているのはアジアの仏教なのではないか、と考えたのでしよう。仏教の中でも小乗仏教というより大乘仏教ですね。

彼は、あまり知識はなかったけれども勉強をして、大乘仏教、あるいは東洋の哲学の中に、何か人類の救いというものが見出せるのではないか、という仮説を立てて来たのではないのでしょうか。それをもって日本に来たんでしょうね。ところが、失望した。そして、戦後、2回目、京都産業大学の招聘を受けて来日しました。彼は、56年に来てから、ずっと大乘仏教について語り合える人を探していた。そして、やっと見つけた。その白羽の矢を立てたのが池田大作氏だったわけです。

どうして池田大作氏を見つけたのだろうか。そこところは、私にはよく分からない。恐らく、普通だったら、大乘仏教と言えば、日本でも偉い高僧が何人かいらっしゃいます。私の友人にも、あの四天王寺の管長、聖徳太子から勘定して百七代目が、私の友人です。その人は、東大でインド哲学を学び、大学院は京大に行きました。そして、京都であの比叡山の回峰行の修行をしている。これは立派な方だと思えます。そういう人を数えたらいくらでもいるのです。ところが、そうした中で、東大を出ていないからとか、学歴だけ言えば、当時の社会では

あまり評価されていない、池田大作氏に白羽の矢を立てた。どうして？ 他にいなかったからです。

人間不信を払拭する東洋の哲学

そして、その対談集『二十一世紀への対話』は、文庫本で4冊。3部から成っています。1部、2部は、現代の色々な社会問題などが取り上げられています。そして、最後の第3部が「宗教と哲学」です。この第3部に入ると、俄然、トインビーの態度が変わります。非常に謙虚な言葉で、池田氏に教えを請います。仏教用語は英語では簡単に翻訳出来ない。池田氏は、出来ない言葉は仏教語で、日本語で語っています。

結局、トインビーは、何が言いたかったのか。一神教的なキリスト教が何故、だめで、何故、仏教の方に魅力を感じたのか。彼自身に語らしめると、キリスト教は布教、伝播する時は、従来の、その土地にあった既成の信仰、哲学を、まさに叩き潰して、破壊する。その上にキリスト教が伝播していくという方法をとっていく。ところが、アジアの大乗仏教の伝播を見ると、そうではない。今までの哲学、宗教と平和的に共存して、そこで新しいそれぞれの場、風土と歴史と文化の伝統に従った宗教に変わっていつている。そういう柔軟さに富んだ教え、それが大乗仏教であり、大乗仏教の伝播の在り方だった。これが21世紀の、また、これからの民族の在り方が、まさにこれなのではないか、ということを考えていたのです。

これは30年前の対談ですよ。私は、今、読んでみて、30年前に何があったか、と考えてみました。恐らく、トインビーが絶望したのは「ベトナム戦争」だと思いますね。ベトナムでアメリカは何発も爆弾を落としても勝てなかったんです。そして、アメリカ自身、今回のイラクともそういうことになるでしょう。あれほど世界最強の軍事大国アメリカが、本当に原始的な戦争、戦う相手を「ベトコン」などと言っていたわけですけど、それに勝てなかった。その時に、恐らく、トインビーは「これではいけない。こんなことをしていたらいけない」と思ったのでしょう。今だったら、もっと酷いことになるでしょうね。パレスチナとイスラエルの問題にしても、一体、どうするつもりですか？ 今度はイラクでしょう。そして、その次は北朝鮮。こんなことをやっていたら、21世紀はお先真っ暗です。

日本は、「応仁の乱」とその後、百年続いた戦国時代に人間不信が極端になりました。招かれてもてなしをされても、いちいち食べるものを毒見しなければならないという時代です。親子、兄弟、あるいは秀吉、信長の一族はどうなりましたか？ 今、NHKの大河ドラマの格好の対象となっていますけれども、本当に人間不信が極端にまで行った。

その時に、利休は堺に独立した茶室を作って、そこを聖なる場所にした。ここでは武器を持たさない。持ち込みを許さない。茶室に入る時には刀と扇子を外にかけて、そして、にじり口から入らせる。鎧兜は付けて入らせない。茶室へ入ったら、ちんちんと煮えたぎるお湯をもってお客の目の前でお茶のお点前をする。こうして、毒が入っていないことを明らかにし、さらに、これを回し飲みする。日本が発明したこの知恵、すごいアジアの文化である。これは人と人との人間関係を大事にする「人間関係主義」です。こういう文明は、個人主義を生み出したキリスト教の信者であるトインビーには分からなかった。

75年に、トインビーは亡くなるのですが、まず、この対談集『二十一世紀への対話』は日本語で出るんですね。そして、トインビーが亡くなった翌年、76年に英語版が出るんです。英語で出たら、世界中の人がびっくりしたんです。そして、次から次へと各国の言葉に翻訳されていったんです。恐らく、日本人の書いたもので20数カ国語に訳されている本は他にありません。

うか？ ノーベル賞をもらっているような人でも、それほど訳されていない。これをどう見るか。

私は、最近ある人に『週刊読書人』7月26日号に載った私の「21世紀は文明の『衝突』か『共生』か」を贈りました。その方は有名なジャーナリストですが、「トインビーとの文明論を読ませていただく前までは、池田大作という人はこんなことを話せる人だとは思っていませんでした。誰かゴーストライターがいると思っていた。しかし、池田氏のこれを読んで、ゴーストライターでは対談は出来ません。見直しました」という一言でした。

日本では「東大出だから偉い」とか、そういうことで人を判断しているのと違いますか？もうそういう時代ではない。私は、21世紀は、世界の人がそれぞれの文化、それぞれの名において、お互いに理解し合わなくてはいけないと思う。平和を目指すには「人間関係主義」を潤すアジアの宗教があり、創価大学の掲げる哲学にあると考え期待しています。

講義みたいになりました。時間がきましたので終わります。ご清聴、ありがとうございました。